「花桜折る少将」の草子地
――中将に寄り添った語りをめぐる一考察――

林　智哉

一　はじめに

「花桜折る少将」は、堤中納言物語の中に収められている短編の一つで、色好みの中将が、姫君を盗み出そうとして、間違えて老尼を盗み出してしまったという冒険失敗譚である。物語の最後は、語り手が文中で自らの感想を述べる所謂草子地の中で、「をこがましうこそ。」と嘆いて終わる。『新編日本古典文学全集』(1)では、これを「まったくあほらしい出来事」と訳し、中将のこの一連の行動を批判しているようにとれる。しかし、文中で語り手は、中将の人物像を、風流人で、美しい顔立ち、また管弦の才にも優れており、圧倒的な魅力を放つ存在として描いているのである。

それほどの人物を、「あほらしい」と批判して話を終わらせることがあるだろうか。他の注釈書ではこの「をこがましうこそ」をどのように解釈しているかというと、『日本古典文学大系』(2)では、「どんなにばからしかったことだろう」とし、『日本古典文学全集』(3)では、「あほらしかったにちがいない」と訳されている。また、『新潮日本古典集成』(4)では、「まったく間が抜けていることだ」とし、土岐武治氏(5)はこの「をこがまし」の解釈を「をこがましうこそありつらめの略。それを知った後の少将は、どんなに馬鹿〳〵しかったことでせうの意」としている。このように、それぞれの注釈書を比較すると、ここの「をこがまし」の解釈は、中将の行いを批判しているという解釈と、中将に同情しているとみる解釈の二つがあることになるが、私は、先ほど挙げた語り手による中将の描かれ方を踏まえて考察すると、語り手は中将を批判しているわけではなく、彼に同情しているように思えてならないのである。そうなると、この物語は単なる冒険失敗譚ではなくなって来よう。

石川徹氏(6)はこの「をこがまし」の語義について、「あほらしい」と訳すのは完全な誤訳であり、「馬鹿に見える」に近いとし、「(中将は)世間の笑い物になって、さぞかし恥ずかしい思いをしたことだろう」と、中将の外聞を思いやった結末として解釈している。また保科恵氏(7)はこれをうけて、語り手は中将の行動を正当化し、同情しており、中将の立場に味方する、略奪の成功を述べる結末と解釈している。

このように語り手が中将に同情し味方した語りがなされているという解釈は、わずかにこの二論文のみが存在しているが、これまでの「花桜」研究史では問題視されていないように思えてならない。両氏とも語義や結末部、男主人公のみを考察対象としているが、この問題を解明するためには、「花桜折る少将」の全体の語りの性質や、関連した作品群までも視野に入れた考究が必要だろう。

本論文では、まず「花桜折る少将」の語り手の立場を明らかにし、「中将の批評」と「語り手の批評(草子地)」から考察する。また、同じ堤中納言物語に収められている、女盗みに準じる話である「思はぬ方に泊まりする少将」の語り手の批評や、「源氏物語」の語り手による光源氏への批評と比較したうえで、「花桜折る少将」の語りの性質を明らかにしていきたい。なお、本論文中に引用した物語の本文は、すべて小学館の『新編日本古典文学全集』を底本としている。

二　草子地の定義

まず、本論文で扱う草子地の定義について、明確にしておく。『源氏物語事典』(8)で「草子地」を調べると、次のように記されている。

> 十六世紀に入ると、『細流抄』などの三条西家の注釈が、一般的な地の文以外で、もしくは語り手当人のことばとして特に注意される部分を「草子地」と呼ぶようになった。中野幸一は、それらを説明・推量・批評・省略・伝達の五類に大別し、さらに強調・感動・傍観の草子地などをも指摘している。いずれにしろ、本文において草子地と地の文とを峻別することは困難であり、作中人物のことばと区別しがたい箇所もある。一方、草子地は作者のことばか、それとも語り手のことばか、という問題も重大であるが、作中に設定されている語り手を物語作家と分けて考えるのが一般的になった現在では、あえて「草子地」なる述語を使わずに(略)

この定義に沿って、本論文では、草子地を語り手のことばとして特に注意される部分と定義する。なお、中野氏の指摘は草子地を作者の言葉として定義している(9)が、現在において、草子地は語り手の言葉とみなすのが一般的であり、ここでは草子地の分類を参考にして、その中の批評の草子地

という言葉を借りて、語り手が感想や人物の容姿を語っている草子地を「批評の草子地」としてあえて扱う。

三　語りの視点の変容

語り手の立場を明らかにするために、まず「花桜折る少将」の語りの特性を見ていきたい。次に引用するのは、冒頭部、月の光にだまされ、常よりも早く恋人の家を後にした男主人公が、花桜の邸の姫君を垣間見る場面である。

①月にはかられて、夜深く起きにけるも、思ふらむところいとほしけれど、たち帰らむも遠きほどなれば、やうやうゆくに、小家などに例おとなふものも聞こえず、くまなき月に、ところどころの花の木どもも、ひとへにまがひぬべく霞みたり。いま少し、過ぎて見つるところよりも、おもしろく、過ぎがたき心地して、（中略）築地のくづれより、白きものの、いたう咳きつつ出づめり。（中略）「その御方は、ここにもおはしまさず。なにとかいふところになむ住ませたまふ」と聞こえつれば、「あはれのことや。尼などにやなりたるらむ」と、うしろめたくて、「かのみつとをにあはじや」など、ほほゑみてのたまふほどに、妻戸をやはらかい放つ音すなり。をのこども少しやりて、透垣のつらなる群すすきの繁き下に隠れて見れば、（中略）よきほどなる童の、やうだいをかしげなる、いたう萎えすぎて、宿直姿なる、蘇芳にやあらむ、（中略）しばし見れば、（中略）ありつる童はとまるなるべし。（中略）「これぞ主なるらむ」と見ゆるを、よく見れば、（中略）と思ふに、やうやう明くれば、帰りたまひぬ。

（三八七～三八九頁）

二重傍線部では中将の行為を表す箇所に敬語が用いられているが、傍線部には敬語が用いられていない。このような無敬語の表現は、「主観直叙」(10)または「自由直接言説」(11)と呼ばれるものに相当するもので、陣野英則氏はこの表現について、語り手の敬意がないわけではなく、動作主自身の意識に語り手が密着しているため尊敬語が用いられない(12)と解している。また、井上新子氏は、この場面の語られ方について、次のように指摘している(13)。

主格が明示されず、敬語も欠如している。男主人公の心内語といった趣の語りである。（中略）同様、男主人公の視点で物語られている。彼の視点と語り手のそれとが重なる叙述である。「めり」、「なり」等の使用は、読み手が男主人公とともに立ち止まり覗いているような錯覚を起こさせる。ここに到ってはじめて「聞え」「のたまふ」という敬語が使用され、彼を外側からとらえよ

うとする語りに転じる。しかし次の瞬間、また語り手は男主人公の視点と同化してしまう。（中略）彼の視線によって世界が発見されてゆくさまは、「べし」という語に端的に表されているだろう。そしてこの場面の最後に、再び男主人公は敬語の使用によって客体化される。男主人公が桜の屋敷の姫君を発見するまでの冒頭部分は、彼の視点によってとらえられた世界あるいは彼の主観に映じた世界であった事を、その語りが証しているといえよう。

冒頭部の語りは、語り手の視点が中将の視点と一体化したものと言っていいだろう。なお、陣野氏の、語り手と登場人物の視点が重なっていても、そこに語り手は存在するという指摘もあるが（14）、今回は屋敷を観察する場面であり、かつ無敬語で、中将の視点が極めて支配的である。そのためここでは井上氏の解釈に基づいて、語り手の視点が中将と一体化していると考えて進める。

つづいて、語り手が中将の意識から離れた場面、すなわち語り手による語りの場面を確認しておきたい。中将が昨夜見た姫君に手紙を書く場面と、物語のクライマックス、中将が姫君と間違えて老尼を盗み出す場面を引用する。

②日さしあがるほどに起きたまひて、昨夜のところに文書きたまふ。

（三九〇頁）

③みつるゑが車にておはしぬ。花は、けしき見ありきて、入れたてまつりつ。火は物の後へ取りやりたれば、ほのかなるに、母屋にいと小さやかにてうち臥したまひつるを、かき抱きて乗せたてまつりたまひて、車を急ぎてやるに、

（三九三頁）

どちらの場面も、中将に対して敬語が用いられており、語り手の視点によって語られている。なお、点線部の敬意の対象は老尼なのであるが、それについては後述する。井上氏は本文③について、次のように指摘している（15）。

結びの、男主人公が姫君と間違えて老尼君を盗み出す場面では、これまでの場面に比して、より男主人公が突き放された体で記され、また語り手の作中世界への介入の度合いが大きくなっている。（中略）男主人公の行動を記す際は、敬語を用いて客体化しているものの、彼の視線に沿った叙述がなされており、そうした語りは彼の失敗を後で種明かしし読み手あるいは聞き手に驚きと笑いをもたらす物語の結構に有効に寄与している。

ここまで述べてきたことをまとめると、この物語は中将の視点と密着した語りと、語り手による語りの二つが存在することになる。したがって、中将と視線が一体化している

場面の草子地は、中将の心情と捉えることができるはずである。中将の視点と一体化した場面での姫君側への批評の草子地と、客体化した場面での批評の草子地を比較すれば、語り手と中将の姫君側への思いの違い（ウエイト）が明らかになり、そこから語り手の立場を考察することができるだろう。

四　中将の視点による姫君側への批評の草子地

まず、冒頭部の語り手と中将の視点が一体化している中で、姫君側の人物を批評している場面を引用する。④は童女に対し、⑤は女主人（姫君）に対する批評であり、女童に対する批評の草子地を傍線で、姫君に対する批評の草子地を二重傍線でそれぞれ示している。

④よきほどなる童の、やうだいをかしげなる、いたう萎えすぎて、宿直姿なる、蘇芳にやあらむ、つややかなる袒に、うちすきたる髪のすそ、小袿に映えて、なまめかし。月の明きかたに、扇をさしかくして、「月と花とを」と口ずさみて、花の方へ歩み来るに、おどろかまほしけれど、しばし見れば

（三八八～三八九頁）

⑤下るるほどもいとなやましげに、「これぞ主なるらむ」と見ゆるを、よく見れば、衣ぬぎかけたるやうだい、ささやかに、いみじう児めいたり。物言ひたるも、らうたきものの、ゆうゆうしく聞こゆ。「うれしくも見つるかな」と思ふに、やうやう明くれば、帰りたまひぬ。

（三八九頁）

④では、女童に対して「をかしげなる」「なまめかし」と、上品な美しさであると評価している。⑤では、姫君に対して、「児めいたり」「らうたき」「ゆうゆうしき」といった形容詞が用いられている。この「ゆうゆうし」について、土岐氏は「ゆゑ〳〵し」とし、「気品のあるやうに聞こえるとの意。ゆゑ〳〵しは故〳〵しで、由緒ありげである。どことなく由緒があるなどの趣に言ふ。この一異文に「ゆう〳〵しく　優々トス」があり、李花亭文庫本の書込「ゆう〳〵しく」がある」と指摘している(16)。中将は姫君を、見た目は幼く、話し方はかわいらしいものの、気品があるように聞こえると評価しているのである。子供らしい様子は欠点であるが、それが逆説的に姫君の纏う気高さを強調している。中将は、姫君側に対して思慕の念が強いことが伺える。

五　語り手による姫君側への批評の草子地

では、語り手の視点による姫君側への人物批評はどうであろうか。調査した結果、語り手の視点とみられる部分による姫君側への批評は、中将よりも少ないものであった。なによりも、語り手の姫君に対する批評が一つもなかったのである。これは、明らかに語り手の立場が中将寄りにあるといえるのではないだろうか。

その一方で、童女に対しては批評が見られたため、注意深く検討していく。次に引用するのは、語り手の視点による童女に対しての批評の草子地である。該当部に傍線を示した。

⑥かの花には、物いとよく言ふものにて、ことよく語らふ。（三九二頁）

⑦ことに責むれば、若き人の思ひやり少なきにや、「よき折あらば、今」と言ふ。御文は、ことさらにけしき見せじとて伝へず。（三九三頁）

⑧花は、けしき見ありきて、入れたてまつりつ。（三九三頁）

いずれにしても敬語は用いられていないが、今回は童女に対しての批評であるため、それも妥当といえる。注目したいのは⑦で、この物語の結末へとつながる取り違えの原因となったのがこの部分である。童女が手紙を姫君に渡さなかったために、姫君が事情を知らないまま話は進み、結果中将は姫君と間違えて老尼を盗み出してしまうのである。また、ことさらに責められたので手引を拒否できなかったという思慮の浅さも見られる。この行動について語り手は、「若き人の思ひやり少なきにや」と嘆いている。この「～にや」は、詠嘆的な言い切りを表す典型的な批評の草子地であり、語り手が童女に対して「若い童女だから、思慮分別も足りないのだろう」と、批判的に評価していることが伺える。

同様に、⑧の本文では、助動詞「つ」に注目したい。『日本国語大辞典』(17)には、「つ」は意志的、人為的動作を表す動詞につくと記されている。文末を「つ」の終止形で強く締めることから、語り手が童女の手引き行為に対して、その意志をことさら見出している書き方であり、⑦と同様その思慮浅さを語り手が暴き立てている批評といえよう(18)。

こうして比較してみると、中将による批評と語り手による批評が異なることは明らかである。中将は童女の外見の美しさや、姫君の幼い物言いの中に垣間見える気高さを評価しているのに対し、語り手は童女に対して思慮分別の足りない人物と批判し、好意的な視線をまったく向けておらず、姫君に対しては批評している場面すらないのである。これはよくある女盗みの一つのパターンとして、姫君側の配慮が足りなかったものとして描かれているともいえるのかもしれない。三田村雅子氏は、堤中納言物語における姫君の

存在は、徹底的に虚像化されるもので、その見た目は不要なだけでなく物語の効果的な展開を妨げかねないものと指摘している（19）。これを踏まえると、語り手が姫君の容姿を語っていないことも、物語の展開には不要なものとして納得できる。

つぎに語り手が唯一姫君側で敬語を用い、容姿を批評している人物を検討する。その人物こそ、物語のオチとなる尼である。次に引用するのは、老尼への批評の草子地である。

⑨母屋にいと小さやかにてうち臥したまひつるを、かき抱きて乗せたてまつりたまひて　（三九三頁）

⑩車よするほどに、古びたる声にて、「いなや、こは誰そ」とのたまふ。　（三九四頁）

⑪御かたちは限りなかりけれど。　（三九四頁）

これらはいずれも語り手の視点による語りのため、語り手が尼に対して敬語を用いていることになる。⑨では、小さやかに臥している人物を中将や読者は姫君であると思っていることになるが、語り手はこの場面でも敬語を用いているため、いわゆる全知の立場として、語り手はこの人物が尼であることを知っていて、敬語を用いているのであろう。

したがって、語り手の立ち位置としては、中将や尼よりは下の立場であり、姫君や童女よりは上の立場に位置していることがわかる。⑪で、初めて語り手による姫君側への容姿の批評がみられる。この「御かたち」を老尼と見ると、盗み出してきた老尼の容貌が、とても美しかったということになる。老尼の容姿がとても美しいという評価はなかなか現実的ではないため、ひねくれた表現といえるだろう。ともすればこの表現は、中将の立場になって受け取ると、姫君を盗み出すことはできなかったが、結果的に美しい老尼を連れてきたため、美人を手に入れるという目的は達成できたという、語り手の精一杯のフォローや同情とみなすことができるのではないだろうか。さらに言えば、姫君側の立場から見たときに、この表現は、美しいはずのない老尼の容姿をあえて美しいと評価したことによって、最大級の皮肉として受け取るはずである。

ここまで中将の視点による姫君側への人物評価と、語り手による姫君側への人物評価を論じてきた。中将は姫君たちに対する思慕の念が強く、好意的な批評が多かったのに対し、語り手は姫君たちに対しての草子地が少なく、また批判的なものがほとんどであった。そして、語り手が中将を批判しているような草子地はなく、明らかに中将に味方した語り方をしているのである。ここまで男主人公が絶対的な

存在として描かれている作品が、ほかにあるであろうか。次の節で、「思はぬ方に泊まりする少将」に登場する男主人公の語られ方や、「源氏物語」の光源氏に対する批判的な草子地と比較したうえで、「花桜折る少将」の語り手の特異性を明らかにしていきたい。

六　「思はぬ方に泊まりする少将」の草子地との比較

次に、同じく堤中納言物語に収められている「思はぬ方に泊まりする少将」の草子地を検証する。故大納言の姉妹は、姉が右大将の子の少将と、妹が右大臣の子の権少将と交渉を持つようになる。二人の少将は呼び名も似ており、親しい親戚同士だったので、ある夜、おのおのが相手を取り違えて契ってしまうという物語である。「花桜折る中将」と「思はぬ方に泊まりする少将」、どちらの話も女盗みをしようとして、結果取り違えてしまうという点が共通している。それならば、この「思はぬ方に泊まりする少将」の語り手は、どの立場から語っているのだろうか。まずは、男側（少将、権少将）に対しての批評を見ていく。

次に引用する⑫～⑮は、右大臣の子の権少将に対しての語り手の批評や、女君が男達に抱いた感情を語り手が述べている場面である。権少将に対して批判的な語り方をしている部分を傍線で示した。

⑫按察使の大納言の御許には心とどめたまはず、あくがれありきたまふ君なれば、御文など、ねんごろに聞こえたまひけれどつゆあるべきこととも思したらぬを

（四六〇頁）

⑬権少将は、大将殿の上の御風の気おはするにことつけて、例の泊まりたるに、いとものさわがしく、客人など多くおはするほどなれど、いと忍びて御車奉りたまふに、左衛門尉も候はねば、時々もかやうのことに、いとつきづきしき侍にささめきて、御車奉りたまふ。大将殿の上、例ならずものしたまふほどにて、いたくまぎるれば、御文もなきよしをのたまふ。

（四六三頁）

⑭やうやうあらぬと見なしたまひぬる心惑ひぞ、うつつとはおぼえぬや。かの、昔夢見しはじめよりも、なかなか恐ろしうあさましきに、やがて、ひきかづきたまひぬ。

（四六四頁）

⑮君は、ただにはあらず、いかに思さるることもやありけむ、いとうれしきに、いたく泣きしずみたまふけしきも、ことわりながら、いと馴れ顔に、かねてしも思ひあへたらむことめきて、さまざま聞こえたまふこともあるべ

し。（略）かかることは、例の、あはれも浅からぬにや、たぐひなくぞ思さるる。

（四六五頁）

いずれの場面でも、男君達に批判的な言辞が目立ち、「花桜折る少将」の語りとは正反対であることがまず見て取れる。⑭では、「昔夢見し」悪夢のような初めて夫の少将と会った夜よりも、恐ろしくあきれるものであったと姉姫君が思っており、少将と権少将二人の強引さを批判している。また⑬では、権少将が妹姫君のもとに通うのではなく、自分のもとに呼び出している。

次にもう一人の少将を見ると、こちらも権少将と同じように自分のもとによび出しており、次の⑯で二人の非常識さが語られている。

⑯いづれも、いとをかしき御ふるまひも、あながちに制しきこえたまへば、いといたく忍びて、大将殿へ迎へたまふ折もあるを、いとかるがるしう、つつましき心地したまへど

（四六二頁）

次の⑰は、少将が妹姫君と逢瀬を持つ場面である。

⑰君も心とく心得たまひて、日ごろも、いとにほひやかに、見まほしき御さまの、おのづから聞きたまふおりもありければ、いかで、「思ふとだにも」など、ひと知れず思ひわたりたまひけることなれば、「何か。あらずとて、うとく思すべき」とて、かき抱きて、おろしたまふほどに、いかがはすべき。（略）「今は、たださるべきに思しなせ。よに、人の御ためあしき心は侍らじ」とて、几帳おし隔てたまへれば、せむかたなくて泣き居たり。これも、いとあはれ限りなくぞおぼえたまひける。

（四六六～四六七頁）

⑮と⑰の二重傍線部は、それぞれの男君が共通に抱いた感情であり、浮気心からの風変わりな契りに、姫君がいっそう愛しく思えたのであろう。語り手は物語の最後に、次のような感想を残している。

⑱劣りまさるけぢめなく、さまざま深かりける御志ども、はてゆかしくこそ侍れ。なほ、とりどりなりける中にも、めづらしきは、なほ立ちまさりやありけむに、見なれたまふにも、年月もあはれなるかたは、いかが劣るべき

（四六六頁）

語り手は、新しくまた珍しい恋は、印象的なものとなるが、それも次第に慣れていくもので、長年恋親しんだ馴染みのある女性に勝るはずがないと嘆いている。浮気者であった二人の少将を批判しているといえるだろう。

これらをみると、「思はぬ方に泊まりする少将」の語り手の立場は、「花桜折る少将」のそれとはっきりと異なること

がわかる。「花桜折る少将」の中将も色好みの浮気者ではあるが、ここまで直接的な言葉で批判されることはないのである。そして、この話は、取り違えの原因が男側にあるという点も、「花桜折る少将」との大きな違いであろう。女盗みのパターンを無視して、男側に配慮が足りないものとして描かれた展開は、男側の常識のなさを強調しているといえよう。「いと馴れ顔に」「ださるべきに思しなせ」といった自分勝手な考え方からもそれは伺える。この「馴れ顔」は、男の身勝手な様を表す表現で、光源氏にも使われている。次の⑲は、「源氏物語」若紫巻で、光源氏が紫の上の寝所へ入る場面である。

⑲いと馴れ顔に御帳の内に入りたまへば、あやしう思ひの外にもとあきれて

（「源氏物語・若紫」二四四頁）

このように、周りの人々はあってはならないことと思っていても、本人はさも当然であるかのような顔で身勝手に振る舞う様を表しており、批判的な表現といえる。

また、男側の容姿を批評する記述がない点も、「花桜折る少将」との大きな違いであろう。「花桜折る少将」の中将は、まさに圧倒的な存在として描かれているのである。

⑳御簾巻き上げてながめ出でたまひつる御かたち、いはむかたなく光りみちて、花のにほひも、むげにけおさる心地ぞする。琵琶を黄鐘調にしらべて、いとのどやかに、をかしく弾きたまふ御手つきなど、「限りなき女も、かくはえあらじ」と見ゆ。

（「花桜折る少将」三九一頁）

光り輝いて見えるほどの容姿や、音楽にも精通している知識人ぶりは、あの光源氏を思わせるほどである。⑳の描写からみても、中将がまだ若いことは明らかであり、それでいて中将という地位にいるということは、まさに光源氏と肉薄する人物であるといえよう。それほど光源氏と共通している中将であるが、彼は光源氏とは違い、直接的な批判をされることがない。光源氏の批判的な語られ方は次の節で述べるが、先ほど引用した馴れ顔のように、光源氏も批判的な語られ方がされているのである。しかし、中将は一貫して批判されることはない。読者は中将の行動に対して、「思はぬ方に泊まりする少将」の男二人のような滑稽さや嫌悪感を抱くことはないのである。

続いて、「思はぬ方に泊まりする少将」の女側の草子地を比較してみたい。

㉑大納言の姫君、二人ものしたまひし、まことに物語に書きつけたるありさまに劣るまじく、何事につけても生ひ出でたまひしに

（四五七頁）

㉒もとより御志ありけることにて、姫君をかき抱きて、御帳のうちへ入りたまひにけり。思しあきれたるさま、例のことなれば書かず。

（四五八頁）

㉓さるべきに思し慰めて、やうやううちなびきたまへるさま、いとどらうたく、あはれなり。昼など、おのづから寝過ごしたまふ折、見たてまつりたまふに、いとあてに、らうたく、うち見るより心苦しきさましたまへり。

（四五八頁）

㉔いと恥づかしうて、御顔ひきいれたまへるさま、いとらうたく児めきたり。

（四六〇頁）

㉕へだてなくさへなりぬるを、女は死ぬばかりぞ心憂く思したる。

（四六五頁）

まずわかるのがこの語り手は女側に対しても、二重傍線部のように敬語を用いている点である。そして、女側の容姿や、感情に対して批評している草子地が多い。「花桜折る少将」の語り手とは対照的に、女側の容姿を評価し、同情しているのである。この物語の語り手は、女側に寄り添った語り方をしていると言えるだろう。そうなると、男側に配慮が足りないものとして描かれていることも納得できる。

七　「源氏物語」との比較（光源氏に対する批判的な草子地）

先ほどの節で、「花桜折る少将」の中将と光源氏との容姿や地位に共通する点があるが、それでいて中将は直接的な批判がされないのに対し、光源氏は「思はぬ方に泊まりする少将」の権少将のように、「馴れ顔」といった批判的な語りもされている事を述べた。この節では、そのような「源氏物語」の語り手が光源氏を批判的に評価している場面を検証する。帚木巻の冒頭を引用する。

㉖光る源氏、名のみことごとしう、言ひ消たれたまふ咎多かなるに、いとど、かかるすき事どもを末の世にも聞きつたへて、軽びたる名をや流さむと、忍びたまひける隠ろへごとをさへ語りつたへけん人のもの言ひさがなさよ。

（「帚木」五三頁）

冒頭から揶揄的な語りである。「光源氏」という名前だけがもてはやされ、それでいてとても言えないような過ちが多いと、光源氏の色恋沙汰を非難している。

次に引用するのは、続く場面、光源氏が中将であった当時を顧みて語る場面である。

㉗まだ中将などにものしたまひし時は、内裏にのみさぶらひようしたまひて、大殿には絶え絶えまかでたまふ。忍ぶの乱れや、と疑ひきこゆることもありしかど、さしもあだめき目馴れたるうちつけのすきずきしさなどは好ましからぬ御本性にて、まれには、あながちにひき違へ心づくしなることを御心に思しとどむる癖なむあやにくて、さるまじき御ふるまひもうちまじりける。

（「帚木」五三～五四頁）

光源氏は、若くして中将となり、まさに前途有望な花形貴公子であるが、根は真面目でありながらも、まれに恋をすると別人のように執心してしまう癖があり、不都合なことが多いと語り手は批判している。

続いて、具体的なやりとりの中で、中将時代の光源氏が批判的に語られている場面を引用する。夕顔巻で、軒端萩と歌を贈答する場面である。

㉘高やかなる萩につけて、「忍びて」とのたまへれど、とりあやまちて、少将も見つけて、我なりけりと思ひあはせば、さりとも罪ゆるしてんと、思ふ御心おごりぞあいなかりける。

（「夕顔」一九一頁）

軒端萩は蔵人少将と結婚しているのであるが、その一方で光源氏とも関係を持っていた。語り手は、光源氏がこの関係を蔵人少将にたとえ知れようとも、「私であれば彼も許してくれるだろう」といったうぬぼれがあると、その傲慢さを批判している。

続いて、軒端萩からの返歌を見て、思いを馳せる光源氏に対して語り手が批評する場面である。

㉙手はあしげなるを紛らはし、さればみて書いたるさま品なし。火影に見し顔思し出でらる。うちとけで向かひゐたる人は、え疎みはつまじきさまもしたりしかな、何の心ばせありげもなくさうどき誇りたりしよと思し出づるに憎からず、なほ懲りずまに、またもあだ名立ちぬべき御心のすさびなめり。

（「夕顔」一九一頁）

語り手は、光源氏が夕顔の急死で忍び歩きには懲りたはずなのに、またも悪い評判が立つような、衰えない軒端萩への好色な心のありようを批判している。

これらの場面は、「花桜折る少将」と同じ中将という地位である点においても、近似性が見られるが、その語られ方は全く異なることがわかる。光源氏は恋する青年として物語に登場するに際し、すでに語り手から大変な批判をうけているが、同じような色恋沙汰の多い「花桜折る少将」の中将は、女の元からの帰途に新しい女を見出して盗み出そうと

するその乱行に対しても、決して批判的な草子地は見られないのである。

ここまでワンサイドな語りがなされているのは、「花桜」成立当時薫型主人公が流行していたという点が挙げられる。仕事から楽器の演奏まで何から何まで完璧で、過剰なほどもてはやされる中将はまさに薫型にあてはまり、望んだ恋がなかなか成就しないパターンも共通している。短編のため、比較しづらいところではあるが。

もっとも「源氏物語」では薫の執心に対して、語り手が批評するような箇所はある。有名なものとしては夢浮橋巻末尾の

㉚人の隠しすゑたるにやあらんと、わが御心の、思ひ寄らぬ隈なく落としおきたまへりしならひにとぞ、本にはべめる。

（「夢浮橋」三九五頁）

などがあるが、「花桜」の中将および語り手は、そういった批判的な視点を捨像した上で、成立しているといえる。本論文では扱えなかったが、機会があれば同じ短編の薫型で、恋の実らない話である「逢坂越えぬ権中納言」の語りとも比較したいものである。

八　おわりに

本論文は、「花桜折る少将」の物語の一つの読み方として、語り手の草子地と中将の批評に注目した。語り手による姫君側への草子地と中将への草子地を比較すると、姫君側には批判的な、皮肉的な語られ方がされているのに対し、中将には一切なされていなかったため、語り手が中将に味方した立場に位置することは明らかである。

また「思はぬ方に泊まりする少将」の語り手と比較すると、男君達に批判的な草子地を使っていることがわかり、中将に終始味方する「花桜折る少将」の語り手の特殊性が見られた。「源氏物語」と比較しても、中将の容姿や地位に光源氏と共通性はあるが、決して光源氏のように批判されることはない。そこに、「花桜折る少将」の語り手の特異性が見られ、語り手は中将を絶対的な存在として語っている。中将の造形と語り手の関わりからは、むしろ薫型主人公の性質を見出すことができた。

こうした性質から考えるに、最後の「をこがましうこそ」の解釈は、「（取違いに気づいた中将の感情は、本当に）馬鹿馬鹿しいものであったことであろう。」となり、続く「御かたちは限りなかりけれど」は、語り手が中将の不幸を自分のことのように思いやっていたわりの気持ちで発した言葉であり、「（取違いはしたけど、老尼の）容姿はとても美しかった。（だから美人を手に入れることには成功したのだよ）」と

いう、励ましともとれる、最後まで中将に寄り添った語りであると考察することができるのではないか。

注

（1）三谷栄一・三谷邦明・稲賀敬二（校注・訳）［二〇〇〇］『新編日本古典文学全集17 落窪物語 堤中納言物語』小学館

（2）松尾聡・寺本直彦（校注）［一九五七］『日本古典文学大系13 落窪物語 堤中納言物語』岩波書店

（3）三谷栄一・稲賀敬二（校注・訳）［一九七二］『日本古典文学全集10 落窪物語 堤中納言物語』小学館

（4）塚原鉄雄（校注）［一九八三］『新潮日本古典集成 堤中納言物語』新潮社

（5）土岐武治［一九七六］『堤中納言物語の注釈的研究』風間書房

（6）石川徹［一九九二］「総論―物語と日記と―」『平安時代の作家と作品』武蔵野書院

（7）保科恵［一九九六］『堤中納言物語の形成』新典社

（8）『源氏物語事典』［二〇〇二］大和書房

（9）中野幸一［一九七一］「源氏物語における草子地」『源氏物語講座 第一巻 主題と方法』有精堂出版

（10）島津久基［一九三六］『対訳源氏物語講話 巻二』中興館 同［一九四七］「敬語要記」『日本文学考論』河出書房

（11）三谷邦明［二〇〇二］「〈語り〉と〈言説〉―〈垣間見〉の文学史あるいは混沌を増殖する言説分析の可能性―」『源氏物語の言説』翰林書房 など

（12）陣野英則［二〇〇四］「〈語り手〉の待遇意識 ―貴公子に対する待遇表現―」『源氏物語の話声と表現世界』勉誠出版

（13）井上新子［一九九五］「『花桜折る少将』の語りと引用」『国文学攷』広島大学国語国文学会

（14）陣野英則［二〇一七］「『花桜折る少将』の切り詰められた世界 ―終末部における中将の乳母登場の意義など―」『知の遺産シリーズ4 堤中納言物語の新世界』武蔵野書院

（15）（13）に同じ

（16）（5）に同じ

（17）『日本国語大辞典 第二版』［二〇〇〇～二〇〇二］小学館 ジャパンナレッジ電子版 二〇二一年一月七日参照

（18）例えば『源氏物語』若菜下巻の小侍従の手引きでは「端に据ゑつ」とあり、新全集の頭注は「「つ」の語勢に注意。大それたことをしてしまった、の気持」と述べる

（19）三田村雅子［一九九一］「短編物語の構造―堤中納言物語の〈例〉―」『国文学 解釈と鑑賞』至文堂

（はやし・ともや 令和二年度本学卒業生）